

グーグルのエリック・シュミットCEOは、は3日付の『ウォール・ストリート・ジャーナル（WSJ）』紙に寄稿し、「読者拡大や収益増加に向けて力になりたい」として、新聞、雑誌などと協力して

各紙誌のネット事業の収益化を後押ししていく考えを示した。これまで、米メディア業界では、グーグルを「ただ乗り」として批判する声が強かったが、今回の寄稿は、こうした批判に反論し、協力姿勢をアピールしたもの。

シュミットCEOは、この寄稿文のなかで、2015年を想定し、小型携帯端末を通じて、印刷媒体のページを繰るのと同様の感覚で、新聞や雑誌を読むことが可能となるほか、外国語の新聞も自動翻訳され英語で読めるようになると予測し、「技術革新を通じて、（新聞や雑誌などの）収益性と活力を確固としたものにできる」と述べている。

グーグル批判の急先鋒は、WSJ紙を傘下に持つニュース・コーポレーションのラパード・マードック会長。ニュースはマイクロソフトとの提携模索中とあり、それを牽制する意味もある今回の寄稿だ。